

2012年
第18回 函館港イルミネーション映画祭
第16回シナリオ大賞受賞作品

審査員奨励賞

ダーレンスキーの 奇跡の夜

審査員奨励賞

「ダーレンスキーの軌跡の夜」

田森 潤也



田森
潤也

【作者プロフィール】

たもり じゅんや

昭和四十九年・札幌市生まれ。札幌市内の中学・高校・大学を卒業し、大学時代に映画の脚本を書いてみよう
と突然思い立つ。第三回函館山ロープウェイ映画祭で
審査員特別賞を受賞。山形県の児童演劇脚本募集、佳
作入賞。その後、脚本を書くことの難しさを感じ、し
ばらく冬眠したのち、一、三年前から再び書き始める。

【あらすじ】

異国情緒溢れる函館の街を舞台に、現代と昭和初期の函館大火の時代が交錯する物語である。

物語の主人公は、アンドレイ・ダーレンスキー・山縣という、マジシャンであり、映画監督でもある謎の日系ロシア人だ。

彼は錦輝館と呼ばれる活動写真の常設館を経営し、ある時はマジックで生計をたてていた。

ハルキという少年は、母親を早くに亡くし、心のよりどころをダーレンスキーにゆだねていた。

そんなある日、函館からアナベラという女性が函館に来ることを知った、ハルキの友人であるサトルは、ハルキを誘い、アナ

ベラに会いに行こうと画策する。

実はサトルは以前、錦輝館で中売りをしていた、ダーレンスキーの葉巻を盗んだばっかりに、クビになってしまったという経緯を持つ。

果たしてサトルは無事にアナベラに会うことが出来るのだろうか？

函館大火の少し前、アメリカの児童施設から、二十三体の人形が子どもたちに贈られる。

そのうちの一体が、タカコという少女に贈られた。その名前は『リテシア・パーム』。

タカコは小学校の音楽室で大事に保管されているその人形のことがいとも頭から離れない。いつも授業中に人形の服を編んでいたのだ。

そんなタカコには病弱な母親がいて、ある日、タカコの暗い顔ばかり見ていた母親が、活動写真を見に行くように、タカコに薦めたのだ。

しかしその日の夜、函館大火により、函館市内が、壊滅的なダメージをうける。

そんな函館に奇跡を起こしたダーレンスキーの物語である。

【登場人物】

- | | |
|---------------------|--------------|
| タカコ(10) | 物語の主人公。 |
| ハルキ(10) | 母を亡くした少年。 |
| サトル(11) | ハルキの友人。 |
| ユウジ(38) | ハルキの父親。 |
| エイジ(42) | タカコの父親。 |
| アナベラ(30) | 魅惑のピアニスト。 |
| オオコウチ(50) | アナベラの通訳。 |
| マリア(18) | アナベラのお手伝い。 |
| ナルセ(48) | ダーレンスキーの付き人。 |
| ヒトミ(33) | ハルキの母親。 |
| シズコ(40) | タカコの母親。 |
| ミゾグチ(24) | タカコの担任。 |
| アンドレイ・ダーレンスキー・山縣(?) | |

謎の日系ロシア人。

○タカコの瞳の中

カメラのシャッターが切れるように、瞳の瞬きが繰り返される。

それは、この物語の主人公・タカコという名の人間の瞳の瞬きだ。

その瞳の中に、タカコの遠い記憶の風景が、次々と映し出される。

以後、瞬きの奥、その瞳の中に映る記憶の風景は、全てモノクロの映像として映し出される。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、一人の大人と十五歳ぐらいの少年の姿だ。

どうやらそれは、一人はハルキと言う少年、そしてもう一人は、ハルキ

の父親である、ユウジのようである。そのハルキとユウジの向こう側には、ぼんやりと函館山が見えるようだ。

ハルキとユウジは、何かの反応を期待しながら、タカコの顔を覗き込んでいるようだ。

両手を振り、タカコの反応を伺っている、ハルキとユウジ。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、現代の函館駅前の街並みだ。

そこは車も人影も全くない、物静かな函館駅前。

ただ落ち葉だけが、風に舞っている。路面電車が、交差点を曲がっていく。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、走っている路面
電車の中だ。

乗っているのは、まだ若い二人の男
女だ。

それはタカコとハルキの二人だ。

そしてシルクハットをかぶった、風
変わりな運転手の後ろ姿。

肩を寄せ合いながら座っている、タ
カコとハルキ。

タカコは、その大きくなつたお腹を
優しくさすっている。

函館市内の街並みが、ただただ路面
電車の車窓の外を流れていく。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、外国人墓地だ。

その中にある、海を望むことのでき
る、一つの墓石。

その墓石には、こう彫られている。

『アンドレイ・ダーレンスキー・山縣

ここに眠る アナベラと共に』

墓石の前に、花束を供える、タカコ
とハルキ。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、炎に包まれてい
る函館の街だ。

それは函館大火の一コマ、大森浜方
面を望む大火だ。

天にまで届くほどの勢いの炎が、函

館の街の中を恐怖に包み込んでいる。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、青い目の人形、その名を『リテシア・パーム』と呼ばれる人形だ。

そして、その人形を大事そうに抱えているのは、タカコという名の少女だ。

頭にバラの花の飾りを添え、ニッコリと微笑んでいる、タカコ。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、大火に包まれて炎上している、第二東川小学校の校舎だ。

炎の勢いで、無惨にも崩れ落ちていく校舎。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、炎に包まれている、第二東川小学校の音楽室の中だ。ピアノの上に置かれている、シヨウケースの中にある『リテシア・パーム』に、今にも火がつきそうだ。

その『リテシア・パーム』の姿を悲しみの表情で見つめている、タカコの顔。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、海に浮かんでいる、豪華客船だ。

それはゆっくりと、函館港に入港してくる。

大勢の函館市民が、その豪華客船に向かって、歓迎の旗や手を振って出迎えている。

× × ×
瞬きが一つ。

そこに見えるのは、名をアナベラという、一人のブルネットのフランス人女性だ。

清楚な佇まいの、美しさを際立たせたフランス人女性だ。

タラップが函館港に下ろされ、函館市民に手を振りながら、船から下りてくる、アナベラ。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、縞模様のシルクハットをかぶった一人の少年・サトルだ。

葉巻をくわえながら活動写真の映写機を回している、サトル。

そこへ突如としてつむじ風が舞い、縞模様のシルクハットが、風に運ばれていく。

慌ててそれを追いかける、サトル。
しかしそれはどんどんと風に運ばれ、空高く高く舞い上がっていく。

× × ×
瞬きが一つ。

そこに見えるのは、懸命に走るサトルの姿だ。

風に揺られ、上下左右に舞っている、
縞模様のシルクハット。

走るサトル。

風に揺られる縞模様のシルクハット。

勢いよく飛び上がる、サトル。

縞模様のシルクハットをつかんだよ
うだ。

風に揺られ、そのまま函館上空を舞
い上がっていく、サトル。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、メリエスの映画
に出てくるような、函館上空に輝く

満月だ。

そして函館上空を舞っているサトル。

そのサトルの視線の先には、素晴ら

しき夜景が広がっている。

月にまで届くように舞い上がってい
く、サトル。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、何かの反応を期
待しながら覗き込んでいる、ハルキ
とユウジの姿だ。

ただその姿はぼやけていて、どうや
らタカコは、眠りに落ちる瞬間のよ
うだ。

そして、その瞳は閉じられ…

やがて暗闇が覆っていく…

○瞳の中の暗闇

そこはどこを行っても、真っ暗な世

界。

深い眠りに落ちた、タカコの遠い記憶の片隅だ。

そこへ画面中央に、一つまた一つと、スポットライトが当たっていく。

どうやらそこは、どこかのステージのようだ。

するとどうだろうか？

そこに一人の男性の姿が現れたのだ。

それは、アンドレイ・ダーレンスキー・山縣という、端正な顔立ちの謎の日系ロシア人だ。

黒づくめのスーツを身にまとい、シルクハットに、口元には立派な髭を蓄え、葉巻をくわえた年齢不詳の男だ。

そこへ映写機の音が響いてくる。

するとダーレンスキーの背後に、函館大火直後の函館山から見える、函館の街並みが映写される。

シルクハットを取り、深々と頭を下げる、ダーレンスキー。

どこからともなく、盛大な拍手が湧き起こってくる。

頭を上げ、シルクハットの中に、まだ燃えている葉巻を投げ入れる、ダーレンスキー。

火がついて燃え始める、シルクハット。

大きく息を吸い込み、燃えているシルクハットに向かって、思い切り息を吹きかける、ダーレンスキー。

すると次の瞬間：

○メイン・タイトル

燃え上がり灰となったシルクハットが、何百匹ものアゲハチョウに変わったのだ。

そして、そのアゲハチョウたちが向かったのは、スクリーンの中に見える、函館の街の中だ。

それらは一匹一匹が街の灯りとなり、函館山から見える夜景を形作り、そして夜空には、メイン・タイトルを形成していく。

メイン・タイトル

『ダーレンスキーの奇跡の夜』

キャスト・スタッフのテロップが流

れ、それに続いて、

○テロップ

画面が暗くなり、
テロップ

『Part I アナベラ』

○末広町・十字街

旧丸井今井百貨店から望む、末広町の十字街。

路面電車が走り、その横を通り過ぎて行く馬車、そして足早に歩いている人々の姿が見える。

そこは、函館大火から復興したばかりの、函館の街並みである。

○同・二十間坂下

二十間坂下の街並み。

日傘をした着物姿の女性たち、丸井
今井百貨店の紙袋を持つ子供たち、
仕事に忙しい男性たちなど、様々な
人々が行き交っている。

○同・馬車

路面電車の横を通り過ぎて行く、一
台の馬車。

その馬車に乗っているのは、アナベ
ラである。

その横には、まだ若い使用人のマリ
アと、通訳の日本人の中年男性・オ
オコウチが乗っている。

十字街の建物を指し、アナベラの耳

元で何やら囁いている、オオコウチ。

アナベラがクスツと笑ったようだ。

そんなアナベラたちの姿を物珍しそ
うに見つめている、行き交う人々。

子どもたちが口々に、『ガイジン、ガ
イジン』と言っているようだ。

人々に微笑み、手を振るアナベラ。

○大森町・住宅街・全景

そこは函館大火後、順調に復興が進
んでいる、大森町の住宅街の中だ。

家々を建設中の大工たち、瓦礫を片
付けている住民たち、親を手伝う子
どもたちなど、それぞれが復興に精
を出している。

○同・サトルの家

骨組みがほぼ完成している家。

そこはハルキの友人である、サトルという名の少年の家だ。

何匹かのアゲハチョウが、家の周りを舞っている。

その前でおにぎりを頬張っている、サトル。

坊主頭で、どこかちよつとワルを氣取った感じの少年だ。

その横には、積み上げられた木材の上でいびきをかいて眠っている、父親のシゲルがいる。

函館毎日新聞を顔の上に載せ、柔らかい春の陽光を遮っている。

サトル「(新聞を見つめ)、ん?…」

シゲルの顔の上から新聞を取り、あの記事に目を丸くする、サトル。

サトル「これ…」

心臓の辺りに手を当てたサトルの顔が、みるみる紅潮していく。

サトル「行かなきゃ」

心地よさそうに眠っている、シゲル。眠っているのを確認し、新聞を握りしめて駆け出す、サトル。

○錦輝館・外観

そこは活動写真の常設館・錦輝館と呼ばれる建物である。

壁には上映中の活動写真

『イタリア縞模様シルクハット

主演 アルベエル・プレジャン』

という映画の看板が掛けられている。

その看板の絵には、風に飛ばされた縞模様のシルクハットを捕まえようとしている、アルベール・プレジヤンの姿が描かれている。

その看板の下には、

『弁士アンドレイ・ダーレンスキー・

山縣』

と書かれている。

数組の親子が、その看板を見上げて
いる。

○同・中

その錦輝館の中は、百人程度は収容
できそうなぐらいの広さである。

ほんのりとした照明が、館内を照ら

している。

客席用として固定式のイスが十列ほ
ど、そしてステージの奥には、スク
リーンが設置されている。

また、ステージの上手側には、ピア
ノが置かれている。

そんな中で、客席の一番前の席に座
り、一枚の写真を愛おしげに見つめ
ている、ダーレンスキー。

○アナベラの写真

ダーレンスキーが見ているのは、シ
スター姿のアナベラが、情熱的にピ
アノを弾いている、モノクロの写真
だ。

○元の錦輝館の中

アナベラの写真を愛おしげに見つめている、ダーレンスキー。

ダーレンスキー「アナベラ…」

そこへ、ナルセというダーレンスキーの付き人が、看板を重たそうに抱えながら、ステージの奥から現れる。歯は抜け落ち、顔はペンキで汚れ、みすばらしい感じの中年男性だ。

ナルセ「ちよい旦那…、こんな感じになりやしたが…」

ダーレンスキーに向けて、看板音絵を見せる、ナルセ。

その看板に描かれている絵は、ダーレンスキーが持っている写真と同様に、ドレスを身にまとい、情熱的に

ピアノを弾く、アナベラの姿だ。

ダーレンスキー「素晴らしい出来だ」

納得の表情を見せる、ダーレンスキー。

ナルセ「ありがとうございます」

照れ臭そうに笑う、ナルセ。

ナルセ「後は…、この変にちよこつと色つけて終わりで…」

ダーレンスキー「今夜までに、間に合わせしてくれ」

ナルセ「へい」

看板を重たそうに抱えながら、再びステージの奥へと入っていく、ナルセ。

ダーレンスキー「アナベラ…」

シルクハットを取り、その中に手を

入れる、ダーレンスキー。

するとどうだろう？

その中から、一輪のバラの花が現れたのだ。

バラの花を空中に放り投げる、ダーレンスキー。

それと同時に、錦輝館の中の照明が全て落ちる。

○大森町・三升楼前

そこは大森町の中にある、焼け残った三升楼前。

何匹かのアゲハチョウが、三升楼の周りを舞っている。

復興に精を出す住民たちを横目に、崩れ落ちた瓦礫の上で、いびきをか

いて眠っている、一人の少年・ハルキ。

ハルキは大衆雑誌『ニコニコクラブ』を顔の上に載せている。

その『ニコニコクラブ』の表紙の挿し絵は、活動写真の映写機を回している、無表情な顔つきのダーレンスキーの姿である。

そこへ、サトルが駆けつけてくる。

サトル「ハルキー！起きろ！」

走ってきた勢いそのままに、ハルキの腰の辺りを蹴飛ばす、サトル。

ハルキ「痛っ！」

驚いて目を覚ます、ハルキ。

サトル「おい！起きろ！」

ハルキの顔の上から、『ニコニコクラブ』を取り上げる、サトル。

ハルキ「何だよ、サトル君?…」

サトル「何だよじゃねえよ」

ハルキ「それ、返してよ」

ダーレンスキーの挿し絵を指さす、
サトル。

サトル「この悪魔から、お姫様を取り返す」

ハルキ「え? 何? お姫様?」

サトル「悪魔から救い出すんだよ」

ハルキ「え? 意味が分からないけど…」

ペラペラと『ニコニコクラブ』をめ
くる、サトル。

サトル「教会から追い出されたヤツの特集

なんて…」

ハルキ「返してよ」

サトルから『ニコニコクラブ』を取
り返そうとする、ハルキ。

サトル、ハルキの手を押さえながら、

サトル「俺は錦輝館で中売りしてたから分
かるんだ。こいつは本物の悪魔だ」

ハルキ「葉巻盗んで、クビになったからつ
てさ…」

サトル「何だよ?」

ハルキ「サトル君は、本当のことを知らな
いんだよ」

サトル「ホントのことって何だよ」

ハルキ「天使だよ」

サトル「天使?」

『ニコニコクラブ』で、ハルキの頭を
叩く、サトル。

ハルキ「痛いって。サトル君の方がよっぽ

ど…」

サトル「何だよ?」

ハルキ「悪魔だよ」

もう一度『ニコニコクラブ』で、ハルキの頭を叩く、サトル。

ハルキ「やめてよ。もう…、一体何の用なのさ？」

サトル「これだ」

ポケットの中から、くしゃくしゃになった、函館毎日新聞を取り出す、

サトル。

ハルキ「何？」

サトル「見ろよ、これ」

新聞の記事をハルキに見せる、サトル。

○函館毎日新聞の記事

開いたそのページには、こう書かれ

ている。

『魅惑のフランス人ピアニスト・アナベラ、今宵、函館、錦輝館へ。情熱的なピアニストである…』

記事の横には、情熱的にピアノを弾く、アナベラの写真が掲載されている。

○元の三升楼前

新聞の記事を読んでいる、ハルキ。

その横で顔を赤らめ、ちよつと照れ臭そうな様子のサトル。

ハルキ「キレイな人だね？で、この人がどうしたのさ？」

サトル「どうしたって…、まあ…、その何だ…、分かるだろ？」

ハルキ「え？何が？」

サトル「鈍いやツだなあ…、（咳払いをして）、

恋だよ…」

ハルキ「え？恋って…」

サトル「何回も言わせるな。恋だよ、恋」

今にも吹き出して、笑ってしまいそ

うな、ハルキ。

サトル「何だよ？悪いかよ？」

ハルキ「そんなことないけどさ…、（笑うの

を我慢して）、サトル君が恋って…」

心臓の辺りを押さえる、サトル。

サトル「ドキドキするんだ。いや、チクチ

クかな…、ここに何か刺さったみたいで

…、こう…、痛いんだよ…」

我慢の限界がきて、腹を抱えて思わ

ず笑ってしまふ、ハルキ。

ハルキ「はっはっはっはっ」

サトル「笑うなって」

ハルキ「だって…、ははは…、だってさ…」

サトル「いてもたってもいられないんだ」

ハルキ「はははは」

サトル「笑いすぎだろ？」

ハルキ「ははは…」

笑っているハルキの顔に、黒い影が

覆う。

ハルキ「（顔を少し上げて）、はは…、あ…」

サトル「何だよ？」

何者かが、サトルの頭を叩く。

サトル「痛っ！」

サトルを叩いたのは、シゲルだ。

シゲル「いてもたってもどうしたって？」

振り返って、シゲルを見上げる、サ

トル。

サトル「父ちゃん……」

シゲル「急にいなくなつたと思つたら、こんな所でサボりやがって……」

サトル「いや……、それはさ……」

シゲル「口答えはなしだ」

サトル「はい……」

サトルの耳を引つ張る、シゲル。

サトル「痛たた……、父ちゃん、痛いつて」

目をつぶり、自分も痛そうな顔をす
る、ハルキ。

シゲル「ハルキ？お前も家帰つて、父親の
手伝いをしろよ」

ハルキ「（頷いて）、はい」

耳を引つ張られて、シゲルに連れ去
られて行く、サトル。

サトル「ハルキ！悪魔から救うんだ！」

シゲル「やかましい！」

サトルの頭を叩く、シゲル。

サトル「ハルキ！」

頷きながら、連れ去られて行くサト
ルの姿を見つめる、ハルキ。

○錦輝館前

錦輝館の壁に掛かっている、看板を
見上げている、数組の親子たち。

そこへ馬車に乗つたアナベラ一行が、
錦輝館の前に到着する。

物珍しそうに、アナベラたちを見つ
める、数組の親子たち。

馬車から降りて荷物を下ろす、オオ
コウチとマリア。

馭者の頬に軽く口づけをする、アナベラ。

アナベラ「メルシィ」

以後、アナベラのセリフは、フランス語とする。

嬉しさと緊張のあまり、固まってしまふ、馭者。

馭者「ど、ど…、ど…、どういたしまして…」

それを見ていた数組の親子たち、一斉に子どもたちの目を手でふさぐ。

オオコウチ「さあ」

オオコウチの手をつかみ、馬車から降りる、アナベラ。

の中。

そこへ重たい扉が開き、錦輝館の、一筋の光が差し込んでくる。

中に入ってきたのは、アナベラ、オオコウチ、マリアの三人だ。

アナベラ「ダーレン?…」

パンッと、一つ手を叩く音が響いてくる。

手を叩いたのは、ダーレンスキーだ。すると、一つまた一つと照明がつき、

錦輝館の中が明るくなってくる。

するとどうだろうか?

床一面に、真つ赤なバラが所狭しと敷き詰められているのだ。

両手を大きく広げ、ステージから降りてくる、ダーレンスキー。

○同・中

照明が落ち、真つ暗な状態の錦輝館

アナベラ「ダーレン…」

愛おしげにアナベラを見つめる、ダーレンスキー。

再会に心をときめかせ、目に涙を浮かべている、アナベラ。

アナベラ「ダーレン…、逢いたかった…」

ダーレンスキーに駆け寄っていく、アナベラ。

そこへ再会を祝福するような、ピアノのメロディが響いてくる。

ピアノを弾いているのは、ナルセだ。

アナベラに駆け寄っていく、ダーレンスキー。

錦輝館の中央辺りで、激しく抱き合う、ダーレンスキーとアナベラ。

ダーレンスキー「アナベラ…」

アナベラ「ダーレン…」

熱い口づけを交わす、ダーレンスキーとアナベラ。

照れ臭そうにお互いの顔を見つめている、オオコウチとマリア。

ダーレンスキー「船は？…」

ダーレンスキーは、フランス語で話している。

アナベラ「あなたに逢うためだもの…、全然…」

ダーレンスキー「私も…、長く…、あまりに長く…、待ちすぎた…」

もう一度、熱い口づけを交わす、ダーレンスキーとアナベラ。

ピアノを弾きながらも、見てもらえないといった表情のナルセ。

ダーレンスキー「君に…、贈り物がある…」

アナベラ「贈り物？」

ダーレンスキー「そう…、目を閉じて…」

そっと目を閉じる、アナベラ。

アナベラの前で、膝をつく、ダーレンスキー。

ダーレンスキー「アナベラ…」

アナベラの左手を取り、手の甲にそ

っと口づけをする、ダーレンスキー。

アナベラ「ダーレン？…」

自分の右手を握り、ふうつと息を吹

きかける、ダーレンスキー。

するとどうだろうか？

ダーレンスキーが手の平を広げると、

そこには七色に輝く、金色の指輪が

現れたのだ。

その指輪をアナベラの左手の薬指にはめる、ダーレンスキー。

アナベラ「ダーレン…」

ダーレンスキー「目を…、開けて…」

そっと目を開ける、アナベラ。

七色に輝く金色の指輪を見て、涙を流す、アナベラ。

アナベラ「ダーレン…、愛してる…」

ダーレンスキー「私も…、愛してる」

もう一度、熱く長い口づけを交わす、

ダーレンスキーとアナベラ。

その周りを何十匹ものアゲハチョウが舞っている。

○大森町・住宅街・全景

順調に復興が進み、活気が溢れている

る、大森町の住宅街・全景。

子どもたちが縄跳びなどをして、遊んでいる姿を春の陽光が照らしている。

何匹ものアゲハチョウが、その周りを舞っている。

そんな子どもたちの姿を見つめながら歩いている、少しだけ大人になったハルキ。

○同・『大森写真館』・外観

そこはハルキの父親であるユウジが経営する、自宅兼写真スタジオである、『大森写真館』・外観。

ショーウィンドウの中には、様々な人々の結婚記念写真や、七五三の子

どもたちの写真など、主に家族の風景が捉えられた写真が飾られている。

そこへハルキが帰ってくる。

○同・中・スタジオ内

小さなスタジオの中では、これから結婚式を迎えるであろう、二人の若いカップルが記念撮影をしている。

正装をし、少し緊張した面持ちの若いカップル。

そんなカップルの緊張を和らげようとしながら、写真を撮っているのが、ハルキの父親のユウジである。

ユウジ「旦那さん？もうちょっと右に寄って……」

男性「は、はい……」

女性の方に少し寄る、男性。

ユウジ「はい。それぐらいで結構です」

お互いの顔を見て、緊張している、

若いカップル。

ユウジ「(懐かしげに)、昔を…、思い出し

ます…」

男性「え？」

ユウジ「あ、いえ…、こっちの話です。で…、

結婚式はいつ？」

男性「え？ああ…、来月に…」

ユウジ「教会で？」

男性「ええ…、まあ…」

もじもじと見つめ合う、若いカップル。

ユウジ「はい。じゃあいきますよ。笑って…」

変に緊張した笑顔の若いカップル。

ユウジ「いきますよ」

フラッシュがたかれる。

ユウジ「じゃあ、もう一枚撮りますね」

そこへ、ハルキが帰ってくる。

ハルキ「ただいま」

ユウジ「お帰り。昼、その辺にあるものを

食べて」

ハルキ「うん」

ユウジ「あ…、奥様、もうちよつと右に」

女性「あ、はい」

ユウジの仕事ぶりを見ながら、奥の方へと入っていく、ハルキ。

○同・居間

居間の中に入ってくる、ハルキ。

壁には、死んだ母親のヒトミの遺影

が飾られている。

その遺影を見上げる、ハルキ。

○テロップ

画面が暗くなり、

テロップ

『Part II ハルキ』

○大三坂・全景

坂の両側に、カトリック元町教会と

真宗大谷派函館別院のある、大三坂・

全景。

その先には函館山が見える。

○チャチャ登り

大三坂を登りきった所から始まる、

チャチャ登り。

その急な坂を登っているのは、ヒトミとその手に引かれている、まだ五歳ぐらいのハルキ、そしてユウジの親子三人である。

ユウジは時折、坂の上から見える、函館の街並みを愛用のライカで撮影している。

息を切らしている、ハルキ。

ハルキ「はあはあ……」

ヒトミ「大丈夫？」

ハルキ「うん。まだ？」

ヒトミ「もうちょっとだからね」

ユウジ「もっと体力をつけないとな？」

ハルキ「だって……」

ユウジ「お父さんは……先行くぞ？」

小走りに坂を駆け上がったて行き、ヒトミとハルキにファインダーを向ける、ユウジ。

ユウジ「撮るぞ？」

ヒトミ「もう…」

ハルキ「ねえ？」

ヒトミ「何？」

ハルキ「チャチャつてなあに？」

ヒトミ「チャチャ？」

ハルキ「うん」

ぐつと腰を曲げて、坂を登る、ヒトミ。

ヒトミ「何に見える？」

ハルキ「何って…、お婆さん？」

ニッコリと微笑む、ヒトミ。

ヒトミ「うん。坂を登る時って…、誰もがこうなって、お爺さんとかお婆さんみた

いでしょ？」

ハルキ「うん」

ヒトミ「だからね、この街にずうつとずうつと昔から住んでいた人の言葉で、そのことをチャチャつて言うの」

ハルキ「ふうん…」

ハルキも腰をぐつと曲げて、坂を登ってみる。

ハルキ「でも…、登りずらいや…」

ヒトミ「(笑って)、ハルキは子どもだもの」

そこへ、一人のシスターが坂を下りてくる。

シスター「こんにちは」

ヒトミ「こんにちは」

ハルキ「こんにちは」

シスター「あの人の所ですか？」

ヒトミ「ええ」

シスター「急がないと、そろそろ始まって
しまいますよ?」

ヒトミ「はい。ありがとうございます」

ヒトミとハルキに軽く会釈をして、
坂を下りていく、シスター。

ユウジ「(叫んで)、おーい!早くしろよ!」

ヒトミ「さあ、ハルキ!急ぐわよ?」

ハルキ「うん」

小走りに坂を登っていく、ハルキと
ヒトミの後ろ姿。

その向こう側では、ユウジが手を振
りながら、二人を待っている。

○『大森寫真館』・倉庫

大森寫真館の奥にある、ユウジが撮

影した写真が数多く保管してある、

倉庫の中。

そこでハルキは、何やら探し物をし
ているようだ。

チャチャ登りの写真や、函館大火の
様子を捉えた写真、十字街の様子を
捉えた写真などが散在している。

ハルキ「あつた!」

ハルキは大きな額に入った、一枚の
写真を見つけたようだ。

○一枚の写真

それは草花が生い茂る、どこかの古
い建物の中庭で撮影された、モノク
ロの写真だ。

写っているのは、五歳の頃のハルキ、

ユウジとヒトミ、頭にバラの飾り物をした五歳ぐらいのタカコ、そして三十名ほどの孤児の子どもたち、何人かのロシア人の司祭、数名のフランス人のシスターたちだ。

そのロシア人の司祭のうちの一人はダーレンスキーで、シスターのうちの一人は、アナベラだ。

○元の『大森写真館』・倉庫

その一枚の写真を見つめている、ハルキ。そこへ、ユウジの声が聞こえてくる。

ユウジ「おい？ハルキ？」

○同・居間

居間の中に入ってくる、ユウジ。

ユウジ「ハルキ？」

しかし、ハルキの返事はない。

ユウジ「ハルキ？」

そこへ、ハルキが額に入った写真を持って、居間に戻ってくる。

ユウジ「どうしたんだ？その写真？……」

ハルキ「うん。懐かしいでしょ？」

思い出すように写真を見る、ユウジ。

ユウジ「これは……あの時か？……」

ハルキ「うん、そう。母さんが倒れるちよ

つと前……」

ヒトミの遺影を見つめる、ユウジ。

ユウジ「懐かしいな……」

ハルキ「でしょ？何か急に……、母さんのこと、

思い出して…」

ユウジ「…」

写真のタカコの姿を指さす、ユウジ。

ユウジ「この子は確か…」

ハルキ「うん。そう、あの子…」

ユウジ「目隠しされて…」

ハルキ「消えた…」

思い出したように、ハルキの顔を見

ながら何度も頷く、ユウジ。

ユウジ「お前と話すの…、何だか久し振り

な気がするな」

ハルキ「そうだね」

ユウジ「なあ？どうだ？」

ハルキ「何？」

ユウジ「久し振りに…、二人で散歩でも？」

ハルキ「散歩？」

ユウジ「そうだ。また、チャチャ登りでも？」

ハルキ「大丈夫？」

ユウジ「何がだ？仕事のことなら心配しな

くても…」

ハルキ「違うよ。父さんの体力…、坂は結

構急だよ？」

ユウジ「お？今俺のこと、バカにしただろ？」

ハルキ「してないしてない」

ユウジ「いやした」

ハルキ「…、(笑って)、はは、ばれた？」

ユウジ「ばればれだよ。でもな、まだお前

には、負けないよ」

ハルキ「どうかなあ…」

ユウジ「でも、その前に…」

ハルキ「何？」

ユウジ「腹ごしらえをしないとな」

ハルキ「そうだね」

腕まくりをし、米を研ぎ始める、ユウジ。

○児童養護施設・全景

チャチャ登りを上がりきった場所にある、大きな古めかしい洋館。

そこは教会の事業として始められた、児童養護施設だ。

外観はどこか教会を思わせるような造りで、函館の街を見下ろすことのできる場所にある。

○同・入口

何匹ものアゲハチョウが、入口付近に舞っている。

入口から建物を見上げている、ハルキ、ユウジ、ヒトミの三人。

ファインダーを覗き込み、建物の外観を撮影する、ユウジ。

ユウジ「こんな所があったなんてな…」

そこへ入口から、一人のフランス人のシスターが出てくる。

シスターに会釈する、ユウジとヒトミ。

ハルキ「こんにちは」

ハルキの頭を優しく撫でる、シスター。

シスター「こんにちは。さあ、どうぞ」

シスターに導かれ、建物の中に入っていく、ハルキ、ユウジ、ヒトミの三人。

○同・廊下

中庭へと続く、長い廊下をシスターに続いて歩いている、ハルキ、ユウジ、ヒトミ。

廊下の両脇には、様々な彫刻が並べられ、学校のようにいくつかの教室がある。

ハルキは、珍しい物でも見るかのよう、キョロキョロと辺りを見回している。

シスター「さあ、どうぞ」

ピアノの音色が響いてくる中庭の入口へと、ハルキ、ユウジ、ヒトミの三人を導く、シスター。

○同・中庭

草花が生い茂る、ユウジが撮影した写真と同じ風景の中庭。

何匹ものアゲハチョウが、草花の周りを舞っている。

そこには、三十名ほどの孤児たちが、円を描くように座っている。

孤児たちの中には、頭にバラの飾り物をしたタカコ、その横には、絶え間なく咳をし、病弱な感じの母親のシズコと、シズコの肩を抱いている、父親のエイジがいる。

その他には、数名のロシア人の司祭、そして数名のフランス人のシスターがいる。

そのシスターの中の一人、ピアノを

弾いているのが、アナベラだ。

孤児たちが囲む円の中心には、シルクハットをかぶったダーレンスキーと、その助手を務める、ナルセがいる。ダーレンスキーは、孤児たちにマジックを披露しているようだ。

その足元には、クエスチョンマークの入った、マジックボックスが置かれている。

ピアノを弾きながらも、ダーレンスキーの姿を愛おしげに見つめている、アナベラ。

そこへ、ハルキ、ユウジ、ヒトミの三人が入ってきて、輪の中に入る。

シルクハットを取り、孤児たちに深々と頭を下げる、ダーレンスキー。

盛大な拍手をする孤児たち。

シルクハットをかぶり、手の平を孤児たちに見せる、ダーレンスキー。そこには手の平サイズの鍵がある。

その鍵を孤児たちに見せ、マジックボックスの鍵穴に差し込む、ダーレンスキー。

何が起こるか、興味津々といった表情のハルキ。

ハルキの顔を見て、ニッコリと微笑む、ヒトミ。

黒いマントをダーレンスキーに渡す、ナルセ。

アナベラにピアノを弾くのをやめるように合図をする、ダーレンスキー。

その様子を固唾を飲みながら、真剣

な表情で見つめる、孤児たち。

鍵を回し、マジックボックスを開ける、ダーレンスキー。

すると突如として、マジックボックスの中から白い煙が吹き出してくる。

煙は徐々にダーレンスキーの体を覆い、そして中庭の中へと充満していく。

煙を振り払う、孤児たち。

パンツと、一つ手を叩く、ダーレンスキー。

と、少しずつ煙が晴れてきて、辺りの景色が見えてくる。

孤児たちと一緒にあって、辺りを見回す、ハルキ。

するとどうだろう？

その孤児たちの円の中心にいたはずのダーレンスキーの姿が、見えなくなっているのだ。

キヨロキヨロと辺りを見回す、ハルキと孤児たち。

しかし、ダーレンスキーの姿はどこにもない。

とそこへ、中庭の入口から、手を叩く音が聞こえてくる。

一斉に中庭の入口の方を見る、ハルキと孤児たち。

そこに立っているのは、両手を広げたダーレンスキーだ。

再びピアノを弾き始める、アナベラ。中庭から、孤児たちの円の中央へと

向かう、ダーレンスキー。

驚きながら、拍手をする孤児たち。

ハルキの側に来て頭を優しく撫でる、ダーレンスキー。

ポカンと口を開けて、ダーレンスキーの顔を見上げる、ハルキ。

と、ダーレンスキーが、ハルキの耳元で、何かを囁いたようだ。

何度も頷きながら、ニッコリと微笑む、ハルキ。

円の中心へと戻っていく、ダーレンスキー。

○路面電車の中

末広町・十字街の中に入ってくる、

路面電車の中。

愛用のライカを持っているユウジと、

車窓から外の風景を眺めている、ハルキ。

その他には、数名の子どもたちと、着物姿の女性たちが、数人乗っている。

そんな人々の姿をファインダーのに残す、ユウジ。

路面電車の側を馬車が通り過ぎて行く。

その馬車を見るハルキ。

一瞬だが、その馬車の乗客には、アナベラの姿が見える。

ハルキ「(呟いて)、アナベラ?…」

ユウジ「どうした?」

ハルキ「ううん…、何でもない…」

馬車の姿が、路面電車の後方に見え

ている。

その姿を遠く見つめる、ハルキ。

ユウジ「なあ？」

ハルキ「何？」

ユウジ「あの時……」

ハルキ「あの時？」

ユウジ「何を言われたんだ？」

ハルキ「…、何も……」

ユウジに向かつて、微笑むハルキ。

路面電車が、十字街の駅に停車する。

○児童養護施設・中庭

変わらずに、孤児たちにマジックを

見せている、ダーレンスキー。

その姿を嬉しそうに見つめている、

タカコ。

咳をしながら、タカコの頭を優しく撫でている、シズコ。

と、ダーレンスキーが突然、タカコを指さして、こちらに来るようにと合図をする。

ダーレンスキーに指名され、戸惑いの表情で、シズコの顔を見上げる、タカコ。

「行って来なさい」と、何度も頷く、シズコ。

ナルセに導かれ、おそるおそるダーレンスキーの元へと向かう、緊張した面持ちのタカコ。

孤児たちに向かつて、両手を広げる、ダーレンスキー。

肩をすくめ緊張した顔のタカコ。

ポケットから、黒いハンカチを取り出す、ダーレンスキー。

固唾を飲んでその様子を見守る、孤児たち。

タカコの目に、黒いハンカチで目隠しをする、ダーレンスキー。

○テロップ

画面が暗くなり、

テロップ

『Part III リテシア・パーム』

○市民館・全景

豊川町にある、市民館。

その前に、多くの子どもたちや、その両親が集っている。

春の陽光が差し込む中、何匹ものアゲハチョウが舞っている。

○同・講堂・ステージ上

ステージの雛壇に、二十三体のケープを来た人形が並べられている。

それは、アメリカの世界児童親善会から贈られた人形たちだ。

その中に、『リテシア・パーム』という名の人形も並べられている。

○同・講堂

その雛壇にある二十三体の人形たちを幼稚園や小学校から来た、代表の女の子たちや、その両親たちが見つめている。

合唱を始める、女の子たち。

女の子たち「海のおちらの友達のこと
まことの心のもってる 可愛い可愛い人形さん
あなたを皆で迎えましょう」

その合唱の中で、タカコは代表の一人として、理事の男性から『リテシア・
パーム』を受け取る。

嬉しそうに人形を見つめる、タカコ。
その姿を見て、涙を流す、母親のシズコ。

○錦輝館前

まだ多少の雪が残っている錦輝館前。
壁には、上映中の映画『ダーレンス
キーのキッド』という映画の看板が
掛けられている。

シルクハットをかぶったダーレンス
キーが、小さな男の子の手を引いて
いる絵が描かれている。

その前にリアカーを引いた、エイジ
がやって来る。

リアカーには、たかさんの配達用の
荷物が積まれている。

看板を見上げる、エイジ。

そこへ錦輝館の中から、ナルセが出
てくる。

ナルセ「今夜七時、開演ですよ」

エイジ「ええ…」

ナルセに軽く会釈をし、先を急ぐ、
エイジ。

○第二東川小学校・全景

函館大火前、まだ校舎が燃えていない頃の第二東川小学校・全景。

建物の造りは、木造平屋の校舎だ。

る生徒がいる。

それはタカコだ。

タカコが編んでいるのは、どうやら

小さな帽子のようだ。

ミゾグチ「この地函館において…」

タカコの方を見る、ミゾグチ。

どうやらタカコの内職に気がついた

ようだ。

タカコの席に向かう、ミゾグチ。

後ろの席に座っている、タカコの友

達であるミツコが、タカコの肩を叩

く。

ミツコ「タカコ？」

タカコ「何？…」

ミツコ「先生来るよ」

ふと見上げる、タカコ。

○同・五年生の教室

そこは授業中の教室内。

担任である若い女性教師・ミゾグチ

が、国語の授業をしている。

ミゾグチ「砂山の 砂に腹這い初恋の 痛

みを遠く思ひ出づる日 この句を詠んだ

啄木は…」

真剣に授業を聞いている生徒、居眠

りをしている生徒など様々だ。

そんな中で、机の下でミゾグチに見

つからないように、編み物をしてい

そこにはため息をつきながら、タカコを見ている、ミゾグチが立っている。

ミゾグチ「タカコさん？」

急いで机の下に、編み物の道具を隠そうとする、タカコ。

タカコ「すみません」

ミゾグチ「もう…、今月四回目よ」

タカコ「すみません。もうすぐ、リテシアの誕生日だから…」

ミゾグチ「学校の勉強も大事でしょ？」

タカコ「はい…、すみません…」

そこへ一人の男子生徒が、急に騒ぎ出す。

男の子「(歌うように)、リテシアの…、服を編む編むタ・カ・コ…」

他の男子生徒も、つられるようにして歌い出す。

男の子たち「リテシアの…、服を編む編む…、

タ・カ・コ…、リテシアの…」

ミゾグチ「こら！静かにしなさい！」

ミツコ「うるさいよー！」

男の子たちは、歌をやめる気配はない。

ミゾグチ「こら！」

ミツコ「うるさいんだって！」

今にも泣き出してしまいそうな、タカコ。

男の子たち「リテシアの…」

突然席を立ち、泣き出して教室から出て行く、タカコ。

○同・廊下

教室を飛び出し出てくる、タカコ。
泣きながら廊下を走っていく。

れている。

『海のあちらの友達の まことの心の
こもってる 可愛い可愛い人形さん
あなたを皆で迎えましょう』

○同・音楽室

壁には、ベートーヴェンやモーツァ
ルトなどの音楽家の肖像画が掛けら
れている。

『リテシア・パーム』を取り出そうと、
ショウケースを開けようとする、タ
カコ。
そこへタカコを追いかけてきたミゾ
グチが、音楽室の中に入ってくる。

部屋の奥には、ピアノが一台置かれ
ている。

ミゾグチ「タカコさん…」

そのピアノの上には、しっかりとシ

タカコ「先生…、ごめんなさい…」

ョウケースの中に入った、青い目の
人形『リテシア・パーム』が置かれ

ミゾグチ「いいのよ。あんな男の子たちの
ことなんてほっときなさい」

ている。

ニツコリと微笑む、ミゾグチ。

ピアノの上の壁には、子どもたちが
書いた、歌の文句が額に入って飾ら

タカコ「ごめんなさい…」
ミゾグチ「私もね、タカコさんの気持ちは

分かるのよ」

タカコ「先生…」

ミゾグチ「私だって、昔は女の子だったんだから」

タカコの頭を優しく撫でる、ミゾグチ。

ミゾグチ「私もね、ウエンディっていう名前の人形を持ってたの」

タカコ「ウエンディ？」

ミゾグチ「うん。隣に住んでいたアメリカ人から貰ったの。でもね…」

タカコ「でも？」

ミゾグチ「いつしか大人になって…、ウエンディのことなんて、忘れちゃった。だからね…」

タカコ「うん」

ミゾグチ「リテシアのことは、大事にしま

しよ？」

タカコを胸に抱きしめる、ミゾグチ。

その胸の中で、泣き出してしまおう、タカコ。

○東川町・住宅街・全景

家々が建ち並ぶ、東川町の住宅街。

夕焼けが、家々を紅く染めている。

まだ少し残っている雪で、雪合戦をしている、子どもたち。

○同・タカコの家

今にも崩れ落ちてしまいそうな、タカコの家。

○同・寢室

布団の上で横になっている、シズコ。顔は青白く、咳が止めどなく出ている。

そんなシズコの枕元には『リテシア・パーム』を大事そうに抱え、頭にはバラの飾りをした、小さな額に入ったタカコの写真が置かれている。そこへ、お粥を持ったタカコが入ってくる。

体を少し起こす、シズコ。

シズコ「ゴホッ…、ゴホッ…」

タカコ「大丈夫？」

シズコ「大丈夫よ…」

そんなシズコに、お粥を食べさせる、タカコ。

シズコ「お父さんは、帰ってきた？」

タカコ「ううん、まだ」

シズコ「そう…、ゴホッ…」

タカコ「お母さん…」

シズコ「ごめんね…、お前に心配ばかりかけてしまつて…」

タカコ「そんなことない…」

何とかお粥を食べる、シズコ。

○タカコの家の前

そこへ、リアカーを引いた疲れ切った様子のエイジが、家の前にやって来る。

荷物は全て配達したようだ。

そんなエイジの頭上を一匹のアゲハチョウが舞っている。

エイジ「(見上げて)、何で…、こんな時期に…」

エイジの頭上高く、舞い上がっていき、アゲハチョウ。

○同・寝室

寝室の中に入ってくる、エイジ。

エイジ「ただいま」

タカコ「お帰りなさい」

エイジ「シズコ？気分はどうだ？」

シズコ「ええ。少しは…、ゴホッ…」

タカコ「大丈夫？」

シズコ「大丈夫よ。ねえ、あなた？」

エイジ「何だ？」

シズコ「たまには…、タカコを活動にでも

連れていってあげて」

エイジ「活動？錦輝館へか？」

シズコ「ええ」

タカコ「いいよ。お母さんおいて、そんな所になんて行けないよ」

エイジ「そうだよ。お前を一人にはできない

いよ」

シズコ「ゴホッ…、今ね、面白そうなのを

上映してるのよ」

エイジに一枚のチラシを渡す、シズ

コ。

それは錦輝館で上映している、『ダー

レンスキーのキッド』のチラシだ。

チラシを見る、タカコ。

シズコ「あの手品師の人が、作った映画み

たいよ」

シズコにチラシを返す、タカコ。

タカコ「ううん。行けないよ」

エイジ「お前が元気になったら、みんなと一緒に行けばいいじゃないか？」

シズコ「私…、ゴホッ…、良くなんてなら
ないわ…」

タカコ「お母さん、そんなこと言わないでよ」

エイジ「そうだよ」

シズコ「ごめんね。でもね、私、タカコの
笑っている顔…、しばらく見てないもの。

いっつも私のことを心配して…、私…、
悲しませてばかり…」

タカコ「そんなこと言わないで」
泣き出してしまふ、タカコ。

シズコ「ねえ、あなた、お願い？タカコの
笑い顔が見たいの」

エイジ「タカコ…、どうする？」

タカコ「…」

シズコ「タカコ…、行つて来て」

シズコの真剣な眼差しを見つめる、
タカコ。

タカコ「うん。分かった」

シズコ「そう。ありがと…、ゴホッ…、ゴ
ホッ…（激しく咳き込む）」

エイジ「大丈夫か？」

シズコ「ええ。私…、少し眠くなつたみたい」
エイジ「タカコ、少し休ませてあげよう」

タカコ「うん…」

エイジに手を引かれて、寢室から出
ていく、タカコ。

ニツコリと微笑んで、静かに眠りに
落ちる、シズコ。

○児童養護施設・中庭

黒いハンカチで目隠しをされている、
タカコ。

その目隠しを外す、ダーレンスキー。
するとどうだろう？

中庭にいたはずの孤児やハルキたち
の姿がどこにもいないのだ。

ただそこにいるのは、ダーレンスキ
ーとタカコだけだ。

タカコ「ここは…、どこ？…」

ダーレンスキー「君の…、未来の中…」

タカコ「未来？…」

ダーレンスキー「そう…」

右手を広げ、ふうつと息を吹きかけ
る、ダーレンスキー。

そこから何百匹ものアゲハチョウが、

舞い上がってきたのだ。

驚きの表情で、アゲハチョウを見上
げる、タカコ。

ダーレンスキー「君の…、命を救うもの…」
タカコ「私の…、命？…」

ダーレンスキー「そう…、目をつぶって…」
そつと目をつぶる、タカコ。

もう一度、黒いハンカチで、タカコ
を目隠しする、ダーレンスキー。

画面が暗くなる。

○錦輝館前

『ダーレンスキーのキッド・今宵、初
日』と書かれたのぼりが、少し強い
風に揺られている。

錦輝館の前には、たくさんの映画を

楽しみにしている函館市民が列をな

して並んでいる。

その列の最後尾に、リヤカーを引いたエイジ、その荷台にはタカコが乗っている。

エイジ「すごい人だな…」

荷台から下りる、タカコ。

タカコ「うん…」

エイジ「どうした？」

タカコ「お母さん…、大丈夫かな…」

エイジ「心配だけど、お母さんの願いなんだ。

お前が笑うこと」

タカコ「うん…」

エイジ「ほら、並ぶぞ？」

エイジに手を引かれて、最後尾に並ぶ、タカコとエイジ。

○同・錦輝館・中

人々の熱気で溢れかえっている、錦輝館の中。

ステージには幕が下ろされている。人々は今か今かと、開演を待ちわびている。

下足番や中売りの少年たちが、観客たちに食べ物などを売りつけている。そこへエイジとタカコが、館内に入ってくる。

タカコ「すごい人…」

エイジ「一番後ろしか、開いてないぞ？」

タカコ「うん。そこでもいい」

一番後ろの席に座る、エイジとタカコ。

○住吉町・住宅街

家々が建ち並ぶ、住吉町の住宅街。

その一軒の家から、火の手があがる。

火の粉が瞬く間に、次々と建物に降り注いでいく。

○錦輝館・中

人々の熱気で溢れかえっている、錦輝館の中。

開演を知らせるブザーが鳴り、静まり返る、館内。

館内の照明が落ち、ステージの幕が上がる。

スポットライトが当たり、そこにダールレンスキーが現れる。

ダールレンスキー「皆様…、ようこそ…」

シルクハットを取り、観客に向かって深々と頭を下げる、ダールレンスキー。

ピアノを弾き始める、ナルセ。

頭を上げ、ポケットの中から、数本のナイフを取り出す、ダールレンスキー。

そのうちの一本を天井に向かって放り投げる、ダールレンスキー。

ナイフは天井に刺さったのか、落ちてこない。

もう一本、またもう一本と天井にナイフを放り投げるが、一本も落ちてこない。

驚きの声を上げる、観客たち。

観客たちを見渡し、パンツと一つ手

を叩く、ダーレンスキー。

するとどうだろう？

天井から、放り投げたナイフの本数

の数の白い鳩が出てきたのだ。

観客の頭上を飛ぶ、白い鳩。

驚きの声を上げる、観客たち。

ダーレンスキー「では……」

そこへ、大慌ての一人の男が、館内

に入ってくる。

男「た、大変だあー！火事だあー！」

一瞬ざわめいた観客たち、すぐにパ

ニックを起こす。

タカコ「お父さん？」

タカコの手を取り、外に飛び出す、

タカコとエイジ。

ぶつかり合い、あるいは人が人を踏

み、押し合いへし合いのパニック状態の館内。

ステージ上のダーレンスキーとナル

セも、上手側から外へと脱出する。

○同・錦輝館外

次から次へとパニック状態で、外へ

と飛び出してくる、観客たち。

そこへタカコとエイジが、外へと飛

び出してくる。

少し先の上空を見る、エイジ。

そこには天にまで届きそうな勢いの

炎が、函館の街を包み込んでいる。

呆然としている、エイジ。

タカコ「お父さん！」

タカコに叩かれ、我に返る、エイジ。

エイジ「シズコ…」

タカコ「お母さんが…」

エイジ「ああ…、そうだ！」

タカコ「お父さん！お母さんが！」

エイジの手を引き、走り出す、タカコ。

パニツクになり、逃げまどう函館市

民たち。

ゴウゴウと音を立て、次々と函館の

街に火の手があがってくる。

○東川町の街並み

強い風に吹かれ、火の手が次から次

へと建物に燃え広がっている。

逃げまどう函館市民たち、消火活動

を行っている市民たちなど、パニツ

ク状態だ。

そんな中を精一杯の力で走っている、

タカコとエイジ。

○走るタカコとエイジ

懸命な表情で走っている、タカコと

エイジ。

自宅はもう目の前だ。

○タカコの家

タカコの家周りも、徐々に炎に包

まれつつある。

そこへ、懸命な表情で走ってきた、

タカコとエイジが到着する。

タカコ「お母さん！」

エイジ「シズコ！」

急いで家の中に入る、タカコとエイ

ジ。

○同・寢室

苦しそうな状態で、逃げようとして、布団から起き上がっている、シズコ。そこへ、タカコとエイジが、寢室の中に入ってくる。

タカコ「お母さん！」

エイジ「シズコ！」

シズコ「タカコ…、良かった…」

シズコの無事を確認し、安堵の表情を浮かべる、タカコ。

タカコ「良かった…」

どうやらシズコは、気を失ってしまっただよう。

タカコ「お母さん！」

エイジ「大丈夫。気を失っただけだ」

シズコを抱きかかえる、エイジ。

エイジ「タカコ…、早く逃げないと…」

寢室を出る、タカコとシズコを抱えたエイジ。

○同・外

タカコの家のそばまで火の手が迫っている。

そこへ家の外に出てくる、タカコとシズコを抱えたエイジ。

エイジ「タカコ、行くぞ？」

火の手の先を見る、タカコ。

それはもう目前まで迫っている。

エイジ「タカコ？急げ！」

タカコ「(呟いて)、リテシア…」

エイジ「タカコ？」

タカコ「ごめんなさい、お父さん……」

エイジ「おい？タカコ！」

第二東川小学校へと向かって、走り

出す、タカコ。

エイジ「タカコ！バカはよすんだ！」

父親の叫びも虚しく、走り出す、タ

カコ。

○テロップ

画面が暗くなり、

テロップ

『PartⅣ ダーレンスキー』

○児童養護施設・中庭

草花が生い茂る、夏の日、夕暮れ時

の児童養護施設の中庭。

庭中にアゲハチョウが舞っている。

ナルセは、ピアノでワルツを奏でて

いる。

そんな中で、ダーレンスキーとアナ

ベラが、手を取り合って踊っている。

その見つめ合う瞳と瞳。

庭中を使って、踊るダーレンスキー

とアナベラ。

アゲハチョウが、そんな二人を祝福

するように舞っている。

ただしかし、中庭の入口には、訝し

げな表情の司祭が一人、その様子を

だまって見つめているのが見える。

○錦輝館・外

上映中の映画『イタリア縞模様』の看板の下に、アナベラは看板を取り付けている、ナルセ。その様子を何人かの通行人たちが見つめている。

○同・中

ステージ上で、情熱的にピアノを弾いているのは、アナベラだ。ダーレンスキーは、愛おしげにその姿を見つめている。オオコウチ、マリアの三人は、アナベラの音色にうっとりとして、聴き惚れている。

○同・外・裏側

そこは非常口のある、錦輝館の裏側だ。

そこに、こそこそとやって来たのは、サトルだ。

裏口から忍び込み、非常口を開けようとする、サトル。

しかし、非常口は鍵が掛かっけて、開けることができない。

サトル「くそっ」

サトルは、もう少し奥にある、通気口の所へと向かう。

サトル「ここなら…」

通気口の網を持っているナイフで、無理矢理外そうとする、サトル。

サトル「あともうちよっと…」

通気口の網が外れ、ちょうどサトル一人分が入れそうな通路が続いている。

その中に入っていく、サトル。

○同・中

ステージ上で、情熱的にピアノを弾いている、アナベラ。

オオコウチとマリアは、そんなピアノの音色に聴き惚れている。

アナベラに近寄り、ピアノを弾くアナベラの手をつかむ、ダーレンスキー。

アナベラ「ダーレン?…」

ピアノを弾くのをやめる、アナベラ。

アナベラ「ダーレン?…、どうしたの?」

ダーレンスキー「アナベラ…、すまない…」
アナベラ「ダーレン?…どうしたの?…」

ダーレンスキーの異変に気づき、不思議そうに見つめる、オオコウチとマリア。

オオコウチ「どうしました?」

ダーレンスキー「いや、何でもない…」

アナベラ「ダーレン?…、私何か…、いけないことを?…」

ダーレンスキー「いや…、君は悪くない…」
アナベラに背を向ける、ダーレンスキー。

どうやらダーレンスキーは、泣いているようだ。

ダーレンスキー「アナベラ…、君のピアノの音色を聴いて…、自分の愚かさに…。」

気づいたよ……」

ダーレンスキーの元へと駆け寄り、
アナベラ。

アナベラ「ダーレン……、もうそれ以上言わ
なくても……」

ダーレンスキー「どんなことをしても……、
君を手放してはいけなかったんだ。すま
ない……」

ダーレンスキーの背中をそつと抱き
しめる、アナベラ。

ダーレンスキー「すまなかつた……」

アナベラ手をしっかりと握りしめる、
ダーレンスキー。

左手の薬指にはめている指輪が、七
色に光っている。

○同・通気口の中

通気口の中を這っている、サトル。
その先に光が見えてくる。

サトル「あとちよつと……」

通気口の出口に手を掛ける、サトル。
と、その瞬間、ニタッと笑う、ナル
セの顔が突如として現れる。

サトル「わあ！」

驚いて悲鳴を上げる、サトル。

ナルセ「またお前か……」

ナルセに引きずられて、通気口から

出

てくる、サトル。

○同・中

ステージ上で抱き合っている、ダー

レンスキーとアナベラ。

そこへ、耳を引っ張られて、ナルセに連れられたサトルがやって来る。

ナルセ「旦那…」

ナルセの方を見る、ダーレンスキー。

ダーレンスキー「また君か…」

ナルセ「通気口から侵入してやした」

ステージ上に放り出され、座り込んでしまう、サトル。

サトル「けっ！煮るなり焼くなり、好きにしろってんだ」

お互いの顔を見て、ため息をつく、ダーレンスキーとナルセ。

ダーレンスキー「もうここには来ないと、約束したはずだ」

サトル「だから、煮るなり焼くなりしろっ

てんだ」

ナルセ「どうしやす？」

そこへ、アナベラがサトルの元へと近づいていく。

アナベラを、見上げる、サトル。

サトル「あ…、お…、お姫様…」

心臓の辺りを押さえる、サトル。

サトルの心臓がバクバクいつてるよ
うだ。

アナベラ「大丈夫？」

アナベラの顔が、サトルの顔に急接近する。

顔を赤らめ、硬直状態のサトル。

サトル「あ…、あ…、あ…」

ナルセ「アナベラさん…、あんまり近づかない方が…」

アナベラ「大丈夫よ」

サトル「あ…、あ…、あ…」

アナベラ「私に会いに来てくれたのね？」

サトル「あ…、あ…、な…、何て？…」

通訳をする、オオコウチ。

オオコウチ「彼女のことが好きなのかと」

激しく何度も頷く、サトル。

オオコウチ「(アナベラに)、そうみたいです」

アナベラ「ありがとう。彼を…、役者にして

みたら？」

肩をすくめる、ダーレンスキー。

サトル「あ…、あ…、あ…」

クスツと笑い、サトルの額にそつと

口づけをする、アナベラ。

そのまま失神してしまう、サトル。

顔を見合わせる、ダーレンスキーと

ナルセ。

○チャチャ登り

坂を登っている、ハルキとユウジ。

ユウジは息も絶え絶えで、ハルキか

ら少し遅れをとっている。

そんなハルキとユウジの周りを何匹

ものアゲハチョウが舞っている。

ハルキ「父さん！早く！」

ユウジ「ちよつと待ってくれよ…」

ハルキ「だらしがないなあ…」

ユウジ「はあはあ…、少し前まで、お前に

は負けなかったのにな…」

ユウジの腰がどんどんと曲がついて

く。

ハルキ「ちよつとしつかりしてよ」

ユウジ「うるさいよ……」

ている。

ようやくハルキに追いつく、ユウジ。

エイジ「ないな……」

ユウジ「はあはあ……、なあ……、そう言えば……」

ハルキ「うん」

ハルキ「何？」

そしてその上がりきった場所には、

ユウジ「あの男はどうなったんだ？」

エイジと車いす乗っているのは、大

ハルキ「ダーレンスキーのこと？」

事そうに『リテシア・パーム』を抱

ユウジ「そう」

えている、タカコだ

ハルキ「知らないんだ」

エイジ「この施設を見に来たんですか？」

ユウジ「知らない」

ユウジ「え？ええ、まあ……」

ハルキ「何ていうかな……、その……、奇跡に

エイジ「そうですね……、ご覧の通り、消え

なつた……」

去りました……」

ユウジ「奇跡？……」

ユウジ「消え去つたつていうのは？」

チャチャ登りを上がりきつた、ハル

エイジ「まあ……、言葉通り、いつの間にか、

キとユウジ。

なくなつてしまつたつてことです」

しかし、その場所にあつたはずの児

タカコの顔を覗き込む、ハルキ。

童養護施設は、跡形もなく消え去つ

しかし、タカコは何の反応もない。

エイジ「娘です」

ユウジ「娘…、さん？…」

エイジ「ええ…、娘は退院したばかりで…、

まあ…、色々…、辛いことがありますし

て…、すみません。こんな話をして…」

ユウジ「いえ…」

振り返り、函館の街並みを見下ろす、

ユウジ。

ユウジ「なあ？ハルキ？」

ハルキ「何？」

ユウジ「ここもいい所だな？たまには…」

ハルキ「うん」

とその時、タカコの右手が挙がり、

施設があつた方角を指し示す。

エイジ「タカコ？…、何か見えるのかい？」

タカコが指し示す方角を見る、ハル

キ、ユウジ、エイジの三人。

そこから、なんと何百匹ものアゲハ
チョウが舞い立ったのだ。

それは上空高く高く、舞い上がって
いく。

そのアゲハチョウの姿を見上げる、
ハルキ、ユウジ、エイジの三人。

○走るタカコ

懸命な表情で走る、タカコ。

辺りはすでに火の手がまわり、建物
や家々が崩れ落ちている。

その中を懸命に走る、タカコ。

タカコ「リテシア…」

目の前に、すでに炎に包まれている、
第二東川小学校の校舎が見えてくる。

○第二東川小学校・外観

炎に包まれている校舎。

そこへ走ってきたタカコ、炎も恐れずに、学校の中へと入っていく。

燃え広がっていく炎。

○同・廊下

炎に包まれている、廊下。

次々と物が倒れてくる中を懸命に走る、タカコ。

○同・音楽室

音楽室のドアを開ける、タカコ。

しかしすでに火の手が回っていて、ピアノの上にある、『リテシア・パーム』にも火がつきそうだ。

おそるおそる、一步一步、『リテシア・

パーム』に近づこうとするが、炎で近づぐことができない。

タカコ「リテシア……」

思い切って、『リテシア・パーム』の元へと駆け寄る、タカコ。

タカコ「リテシア！」

タカコが『リテシア・パーム』をつかんだ瞬間、天井が崩落し、タカコの上に瓦礫が落ちてくる。

○第二東川小学校・上空からの風景

燃え上がっている、第二東川小学校の校舎。

その炎の勢いは、天にまで届きそうな勢いだ。

と、その校舎から何百匹ものアゲハ
チョウが、上空へと舞い上がってく
る。

そして、そのアゲハチョウに運ばれ
ているのは、タカコと『リテシア・
パーム』だ。

気を失ってはいるが、それは確かに
タカコである。

函館上空を舞い上がっていく、アゲ
ハチョウ。

メリエスの映画に出てくるような満
月が、函館の夜空に輝いている。

それはまるで…、
ダーレンスキーのマジックのようだ。

○タカコの瞳の中

カメラのシャッターが切れるように、
瞳の瞬きが繰り返される。

それはタカコの瞳の中だ。

しかしその記憶はモノクロのもので
はなく、カラーのものだ。

その中には、タカコの瞳の中を覗き
込んでいる、ハルキの姿が見える。

両手を振り、タカコの反応を待つて
いる、ハルキ。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、第二東川小学校
の火事の後だ。

崩れ落ちた瓦礫の上に、不思議とシ
ルクハットだけが燃えずに残ってい

る。

× × ×

瞬きが一つ。

そこに見えるのは、両手を振り、反応を待っている、ハルキの姿だ。

ただ今度は、タカコの瞳もハルキの動きに合わせて動いているようだ。

嬉しそうな表情のハルキの顔が見える。

タカコの意識が回復したようだ。

何度も何度も瞬きが繰り返されている。

○クレジット

風に揺られて、函館市内上空を舞っている、縞模様のシルクハット。

それを追いかけている、サトル。

手が届きそうで届かない。

それは五稜郭から函館駅前、そして

二十間坂の上を舞っている。

やがてそれは函館山上空まで舞って

いく。

その映像に合わせて、クレジットが

流れていく。

(終わり)

本電子書籍は、2012年11月30日発行の『第18回函館港イルミネーション映画祭2012 第16回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、審査員奨励賞受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第18回函館港イルミネーション映画祭2012
第16回シナリオ大賞 審査員奨励賞受賞作品

ダーレンスキーの奇跡の夜

作：田森 潤也

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2013年4月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
